
SLAVIC-EURASIAN RESEARCH CENTER NEWS No.140 February 2015

新センター長から



田畑伸一郎

2月1日からセンター長を務めることとなりました。国立大学が法人化された2004～2005年度（平成16～17年度）に務めて以来、2度目となります。よろしくお願いいたします。

来年度は、第2期中期計画（2010～2015年度）の最終年度に当たります。センターが次期中期計画期間（2016～2021年度）においても共同利用・共同研究拠点として活動できるかが決められます。センターは、2013年度におこなわれた共同利用・共同研究拠点の中間評価において、最高のS評価を受けました。来年度におこなわれる期末評価においても、同様の評価が得られるよう万全の準備をしたいと考えております。

センターは、2014年4月にスラブ・ユーラシア研究センターに改称しました。これによって、センターのカバーする地域が拡大したと見る向きもあるようですが、センターが旧ソ連・東欧地域を中心に研究する機関であることに変わりはありません。一方で、センターは新学術領域研究「ユーラシア地域大国の比較研究」（2008～2012年度）やグローバルCOEプログラム「境界研究の拠点形成：スラブ・ユーラシアと世界」（2009～2013年度）などを通じて、世界の他地域を研究する研究機関・研究者との連携を深めてきました。また、北極圏研究や北東アジア研究についても、今後、センターは関与を強めようとしています。今年、センターが1955年に法学部附置スラブ研究所として官制化されて以来60周年となります。センターの立ち位置を真剣に考える年になりそうです。

私は、北大が2012年に設立したヘルシンキ・オフィスの所長を務めてきました。また、ロシアと近隣地域における研究の学内連携をはかるために2014年初めに立ち上げられた北ユーラシア研究会の会長も務めています。北大が、ロシアや北極圏を含む北方地域の研究を北大の重点的な研究、特色ある研究の1つとして促進しようとしていることは、センターにとっても喜ばしいことです。スーパーグローバル大学に選ばれ、大学の世界展開力強化事業（ロシア）も採択され、北大のいっそうのグローバル化が目標とされるなかで、国際的な研究活動を常に推進してきたセンターが応分の貢献をできるよう努めたいと考えています。今年、5年に一度のスラブ研究の世界大会（ICCEES世界大会）がアジアで初めて幕張で開催される年でもあります。今後とも、ご支援をよろしくお願いいたします。

研究の最前線

◆ 2014 年度冬期国際シンポジウム ◆ 「^{ボーダー}境界：ユーラシアで交差する動力」開催される

センターは、2014年12月4日（木）と5日（金）の2日間、半期に一度の国際シンポジウムを開催しました。今回は、センターに事務局が置かれている境界研究ユニット（UBRJ）が中核となり、「^{ボーダー}境界：ユーラシアで交差する動力」というテーマの下で6つのセッションを組織しました。昨年度で大型プロジェクトはすべて終了したため、各専任教員が研究代表者をつとめる科研費等のプロジェクト資金を持ち寄る形での開催となりました。また、公益社団法人北海道国際交流・協力総合センター（HIECC）との共催でもあります。国外から、米国、中国（2名）、ロシア（2名）、韓国、ノルウェー、ポーランド、インド、ハンガリーから著名な研究者・実務者を招待しました。2日間で89名（延べ133名）もの多数の方の来場をいただきました。

「ボーダースタディーズにおける実践的意義」と題するセルゲイ・ゴルノフ（スラブ・ユーラシア研究センター外国人研究員）による基調報告を皮切りに、初日にはセッション1「国境観光」、セッション2「災害と移住者」、2日目にはセッション4「北極圏」、セッション5「ロシアをめぐる国際関係」、セッション6「戦間期ソ連外交」が組織されました。初日のセッション3では地域研究における境界の問題についてパネルディスカッションをおこないました。シンポジウム全体で多様なテーマでのセッションを組むことで、我が国（そして、世界）における境界研究の現段階を知る上で今般のシンポジウムは格好の場となりました。

このように、シンポ全体では多様な報告がおこなわれたわけですが、（政治）地理学的な境界研究「理論」と個々のフィールドでの問題解決の「実践」の問題とをいかに架橋するののかという問題関心が強く現れたという点が特徴的でした。これに加えて、「理論」「実践」双方の基礎となる、質の高い境界地域・越境現象の「記述・分析」、そして地域間「比較」をおこない、これらの要素を組み合わせていくことで我が国の境界研究を発展させていくという、一つの新たな方向性が今回のシンポジウムで示すことができたように思います。



シンポジウムの緊張感が去り、楽しい交流のひとつ

4日には札幌アспенホテルでレセプションが、6日（土）には小樽・余市方面でのエクスカッションがおこなわれ、センター関係者と参加者との親睦が図られました。アспенホテルでのレセプションは通常のシンポジウム時よりも小さな会場でおこないましたが、これが逆に参加者の距離を縮めることになり、和気藹々とした親睦の場となりました。

最後に、司会・報告者・討論者の皆様、シンポジウムにお越しいただいた皆様へ感謝申し上げます。また、事務方・助教・研究員・RAの皆様のお蔭でロジ面も滞りなく進めることができました。ありがとうございました。[岩下/地田]

◆ ブレーメン大学東欧研究センターで合同ワークショップを開催 ◆

2014年12月1-2日、ドイツのブレーメン大学で、大学間交流協定に基づく「北海道大学交流デー」が開かれ、スラブ・ユーラシア研究センターからは宇山と高橋（沙）、およびヘルシンキ・オフィス長として田畑が参加しました。1日の午前中に海洋環境科学センターで全体会が開かれ、海洋調査関係の施設見学をした後、午後は部局等に分かれて6つのワークショップがおこなわれました。このうち文系唯一のワークショップが、同大学東欧研究センターとスラブ研の共催により、以下の通り開かれました。

**Religion, Power and Nationalism in Russia and Central Asia
from Late Socialism to the Present**

Opening Remarks and Introduction of the Research Center for East European Studies (Prof. Schattenberg)
Introduction of the Slavic-Eurasian Research Center (Prof. Uyama)

Session 1

UYAMA Tomohiko, "Dilemma of Nationalism and Regional Integration after Crimea: Focusing on Central Asia"

Felix Herrmann, "Virtual Research Environment: Social Science Data on Central Asia and the Southern Caucasus (DataCASCade)"

Susanne Schattenberg, "Brezhnev and His Scenario of Power"

Session 2

TAKAHASHI Sanami, "An Interpretation on Religious Art and the Andrei Rublev Museum in Late Socialist Russia"

Nikolay Mitrokhin, "Russian Nationalism and the Russian Orthodox Church from the mid-1940s till the War in the Donbass Region in 2014"

Ulrike Huhn, "Soviet Believers: Identity of Orthodox Peasants in the Post-Second World War Period"

シャッテンベルク・センター長の司会のもと、双方の参加者が英語とロシア語を自由に切り替えながら、活発で和気藹々とした議論がおこなわれました。ワークショップの後は、東欧研究センターの図書室とアーカイヴを見学しました。このアーカイヴはサミズダート（地下出版物）をはじめ、ソ連・東欧からの亡命者がもたらした出版物や私的文書、写真などの豊富なコレクションで有名です。最近収集された資料にはチュヴァシ詩人の故ゲナジー・アイギのものが含まれており、手紙類の中にはスラブ研関係の日本人研究者の名前も見え、研究者の活動もこうして歴史の一部になっていくのだと興をそそられました。ソ連時代後期を専門とする高橋研究員は、ぜひまとまった期間滞在してアーカイヴを調査したいと、意欲を示していました。



東欧研究センター図書室の展示。ソ連の異論派詩人ユーリー・アイヘンヴァリドのタイプライター

東欧研究センターの研究員のうちニコライ・ミトロローヒン氏は、ロシア正教とロシア政治・民族主義の関係について、最近のウクライナ情勢も視野に入れながら鋭い論考を発表しているモスクワ出身の研究者です。ソ連時代の民衆の正教信仰を専門とするウルリケ・フーン氏共々、高橋研究員をはじめとするスラブ研の研究者との協力関係を強化できそうです。

12月2日には、高橋は東欧研究センターのアーカイヴ調査を続けました。宇山はミュンヘン大学歴史芸術学部に移って、スラブ研に滞在したことのあるアンドレアス・レンナー氏やゾーレン・ウルバンスキー氏の協力によりセミナーを開催してもらい、"Cultural Encounters

and National Movements in Early Twentieth-Century Central Asia: Kazakh Intellectuals, Islam, and Russia” と題する報告をおこない、ここでも大変充実した議論をすることができました。ドイツのロシア・旧ソ連研究者の層の厚さ、研究熱心さと親しさを実感することのできた2日間でした。[宇山]

◆ ソウル大とのジョイント・シンポ分科会「ウクライナはどこへ」開かれる ◆



おもな参加メンバー

毎年恒例の北大とソウル大 (SNU) との合同シンポジウムの枠組みで、12月6日(土)にセンターとソウル大学のロシア・東欧・ユーラシア研究所 (IREEES) との合同分科会がセンター大会議室でおこなわれました。今回はソウル大学アメリカ研究所から Yi Okyeon 所長ほか2名の参加もあり、議論に奥行きが増しました。

はじめに家田センター長と SHIN Beom-Shik IREEES 所長による開会の辞があり、このような研究集

会で両組織の協力を継続することの意義深さが確認されました。

分科会は三部で構成されました。第一部ではウクライナ危機をロシアとアメリカの外交の視点だけでなく、ウクライナ内部の経済構造からも考察する報告がありました。韓国人研究者が、ウクライナ東部の「非承認国家」やロシアによるクリミア併合を北朝鮮との統一の問題と関連付けていたのは興味深く思われました。第二部は歴史、第三部は文学をテーマとし、ウクライナ自体の民族的・宗教的な多様性に加え、ロシアとウクライナそれぞれのナショナリズムの起源がいかに複雑に絡み合っているかを深く議論することができました。そしてそれは翻って、日韓の歴史問題と領土問題が過度に政治化していることを否応なく想起させるものでした。

当日はスラブ・ユーラシア研究センターに滞在する外国人研究員や大学院生を含む25名(うち外国人10名)が参加し、活発な議論を交わし親睦を深めました。[長縄]

Opening Remarks 13:00-13:10: Osamu Ieda (director of SRC); Shin Beom-Shik (director of IREEES)

Session 1 (13:10-15:00): **Ukraine as a Crucible to Russia and the West**

Chair: Osamu Ieda (SRC)

SHIN Beom-Shik (IREEES), “Russia and the Ukraine Crisis”

Michitaka Hattori (SRC), “Political Economy of Ukraine Crisis”

PARK Won-Ho (Dept. of Political Science and International Relations, SNU), “The Ukraine Crisis from the US Perspective”

Discussant: LEE M Kyung-Hoon (IREEES)

Session 2 (15:10-16:25): **Between National Narrative and Multiple Reality**

Chair: Yi Ok-Yeon (Director of American Studies Institute, SNU)

HAHN Jeong-Sook (IREEES), “Mikhail Hrushevskii’s View of Ukrainian History”

Zaynabidin Abdirashidov (SRC), “A Muslim Voice from Crimea: The Birth and Development of the Turkic Newspaper Tarjuman” (in Russian)

Discussant: Norihiro Naganawa (SRC)

Session 3 (16:35-17:50): In the Mirrors of Eastern Slavic Literature

Chair: Tetsuo Mochizuki (SRC)

LEE Kyong-Wan (IREEES), "Christian Reflections on Ukrainian Images at Gogol's Oeuvres and Trends of Criticism"

Go Koshino (SRC), "Belarusian Literature Written in Russian: A Case of Jewish Writer Grigory Reles"

Discussant: MIN Byung-Chun (SNU)

◆ **アムール・オホーツクコンソーシアムの国際ワークショップ開催される** ◆

アムール川流域とオホーツク海の環境に関する情報を共有し、この地域の環境保全や持続可能な資源活用を促進するための研究者による多国間ネットワークとして2009年に発足したアムール・オホーツクコンソーシアムの国際ワークショップが、北大低温科学研究所環オホーツク観測研究センターとスラブ・ユーラシア研究センターの主催、総合地球環境学研究所の共催で12月17～18日にセンターで開催されました。このコンソーシアムは隔年で国際会合を開くことになっており、2015年の第4回会合はハルビンで開催することが決まっております。今回の集まりは、それに向けた国際ワークショップと位置付けられたものです。ワークショップには、ロシア、中国、モンゴルの各国から幹事を含む数人の研究者が参加され、「アムール・オホーツク地域の環境・持続可能な発展に関する進展」、「アムール・オホーツク地域の持続可能な未来へ向けての提案」、「2015年ハルビンでの国際会合へ向けて」の3つのセッションが設けられました。来年のハルビンでの会合に向けてよい議論ができたように感じました。[田畑]



ワークショップのあとで

◆ **特別シンポジウム** ◆

「社会主義・ポスト社会主義と戦後日本社会：佐藤経明先生の遺産」開催される

上垣彰、塩川伸明、栖原学、富田武の4氏と田畑が呼びかけ人となって、標記の特別シンポジウムが2014年12月20日（土）に日本大学経済学部で開催されました。これは、昨年8月5日に佐藤経明先生が89歳で亡くなられたことを受けて開かれたものです。シンポジウムでは、岡田裕之（法政大）「日本における社会主義経済研究の起点と終点：同世代研究者の回顧と評価」、上垣彰（西南学院大）「いま、佐藤経明著『現代の社会主義経済』（岩波新書、



シンポジウムの様子

1975年)を読む」、中兼和津次(東大)「佐藤経明、社会主義、中国」、富田武(成蹊大)「戦後マルクス主義と佐藤先生：スターリン主義から構造改革論へ」の4本の報告がなされました。会場には、佐藤先生が学会の名称変更を主導された比較経済体制学会のメンバーだけでなく、多くの歴史学者や政治学者の方々も集まれ、先生の交流関係の幅広さ、関心の奥深さをあらためて感じる場となりました。[田畑]

◆ JIBSN：竹富セミナー盛況のうちに終了 ◆



セミナー会場のようす

昨年11月14日、沖縄県竹富町西表島にある中野地区地域活性化施設(わいわいホール)にて、毎年恒例となっている境界地域研究ネットワークJAPAN(JIBSN)竹富セミナーが境界研究ユニット共催の下で開催されました。今回の竹富セミナーは西表島という空港のない離島での開催だったにもかかわらず、北は稚内、東は根室、西は五島・対馬・与那国の各自治体からの参加者を含め、日本全国からの研究者・実務者、竹富町の一般市民や地元紙の記者などを含め総勢58名の参加があり、大盛況

となりました。セミナーでは、対馬=釜山で日本初の試みがなされた国境観光の今後の発展について、また、国境離島を悩ませる海洋ごみ問題への自治体・民間の取り組みについて議論されました。翌日は、西表島、由布島、竹富島の巡検もおこなわれました。竹富セミナーの詳細内容はNPO法人国境地域研究センターおよび境界研究ユニット(UBRJ)のホームページをご覧ください。[地田]

◆ 2015年度「スラブ・ユーラシア地域(旧ソ連・東欧)を中心とした総合的研究」に関する公募結果 ◆

2014年度と同様に、「プロジェクト型」の共同研究、「共同利用型」の個人による研究、センターが設定した課題による「共同研究班」の班員の募集をおこないましたが、2014年12月14日の共同利用・共同研究拠点課題等審査委員会において応募者を審査した結果、以下の方々を採択されました。[山村]

2015 年度採択者一覧

1 「プロジェクト型」の共同研究

	申請者氏名	所属機関・職	研究課題名
1	井上 貴子	大東文化大学国際関係学部・教授	ユーラシア諸国におけるキリスト教受容の比較研究
2	巽 由樹子	東京外国語大学大学院総合国際学研究院・講師	ロシアにおける出版資本主義と帝国秩序との相互補完性に関する研究
3	松戸 清裕	北海学園大学法学部・教授	ソ連市民の消費生活に関する学際的研究
4	三谷 恵子	東京大学大学院人文社会系研究科・教授	中世スラヴ語テキストの多元的研究：スラヴ文献言語学の新たなアプローチをめざして

2 「共同研究班」の班員

	申請者氏名	所属機関・職	研究課題名
①班	山崎 典子	東京大学大学院総合文化研究科博士課程	①中央ユーラシア・ムスリムの歴史・社会に関する共同研究
②班	前田 しほ	東北大学東北アジア研究センター・特任助教	②スラブ・ユーラシアにおける記憶と文化に関する共同研究
③班	朱 永浩	福島大学経済経営学類・准教授	③スラブ・ユーラシア地域を中心とする境界・国境研究

3 「共同利用型」の個人による研究

	申請者氏名	所属機関・職	研究課題名
1	梅村 博昭	なし	ロマン・アルビトマン（カツツ、ゲールスキー）の歴史改変評論の研究
2	塩谷 哲史	筑波大学人文社会系・助教	18-19 世紀ロシア＝中央アジア間の隊商交易と交通に関する研究
3	醍醐 龍馬	日本学術振興会特別研究員	帝政ロシアの極東政策とサンクトペテルブルク条約
4	中野 幸男	東京大学大学院人文社会系研究科・研究員	インターネットと自画像：亡命ロシア文化、都市と自意識について
5	野部 公一	専修大学経済学部・教授	経済体制移行下におけるシベリア・極東農村の変貌
6	白村 直也	内閣府日本学術会議事務局・学術調査員	チェルノブイリ原発事故後に海外から寄せられた子育て支援をめぐる
7	古川 哲	聖心女子大学文学部・非常勤講師	『文学新聞』でのアジア・アフリカ文学の評価：プラトーフ再評価の文脈として
8	村知 稔三	青山学院女子短期大学子ども学科・教授	近代ロシア子ども史に関する基礎的研究
9	ヨフコバ四位エレオノラ	東京大学、筑波大学、東京外国語大学、至誠館大学等・非常勤講師	ブルガリア語の -l 分詞のアスペクト的特徴と機能の分布

◆ 2015 年度鈴川・中村基金奨励研究員募集中 ◆

鈴川・中村基金の奨励研究員制度は、鈴川正久氏と中村泰三氏からのご寄付を活用して、大学院で学ぶ方々にセンターの施設や人材をご利用いただくことを主旨としたものです。この制度を利用して、これまでに多くの大学院生がスラブ・ユーラシア研究センターに滞在し、センターおよび北大附属図書館の文献資料の利用、センターで開催されるシンポジウム・研究会への参加、センターのスタッフとの意見交換をおこない、実りのある成果を挙げてきました。

2015 年度も昨年同様に募集をおこないます。募集人数は若干名とし、助成対象者は原則として博士後期課程の大学院生です。助成期間は 1 週間以上 3 週間以内です。滞在期間は、原則として 2015 年 7 月から 2016 年 2 月の間。センターの行事をご勘案の上、時期と期間を選んで応募してください。最終的な日程の調整は、採用後ホスト教員とおこなうことになります。滞在中に一度、自身の研究について発表することが義務づけられます。公募締め切りは 4 月末、選考は 5 月中におこなわれ、結果が通知されます。募集要項・応募用紙はセンターのホームページで参照およびダウンロードできます。ふるってご応募ください。[望月]

<http://src-h.slav.hokudai.ac.jp/applications/index4.html>

◆ 研究会活動 ◆

ニュース 139 号以降、センターでおこなわれた諸研究会活動は以下の通りです。ただし、今号で独立して紹介したものは省略します。[大須賀]

- 11 月 15-16 日 プロジェクト研究会「ユーラシア諸国におけるキリスト教受容の比較研究」 松川 恭子 (甲南大)「インド、ゴア州におけるポルトガル支配とキリスト教徒の現在」; 井上 貴子 (大東文化大)「南インドの教会・礼拝・聖歌:土着化と多様化をめぐる」; 高橋 沙奈美 (センター)「聖人崇拜から見るロシアのキリスト教受容の独自性」; 井上 岳彦 (札幌学院大)「ロシア帝国のプロテスタント布教:モラヴィア派と仏教徒の接触を中心に」; 村上 志保 (立命館大)「中国におけるプロテスタントの拡大と『中国教会』の形成」
- 11 月 20 日 小野 瑞絵 (北大・院)「ここは、エジプト? シリア? いいえ、ロンドニスタンです: イギリス・ムスリムコミュニティ調査報告」(北海道中央ユーラシア研究会/昼食懇談会)
- 11 月 22 日 一緒に考えましょう講座 秋元 信二 (北大農学研究院)「放射能汚染地域での生物調査:放射能のアブラムシへの影響」
- 11 月 26 日 Pavel Minakir (ロシア科学アカデミー極東支部経済研究所)「ロシア極東:その戦略と現実」(講演会)
- 12 月 7 日 一緒に考えましょう講座「福島原発事故の県外母子避難者の現状」 穴戸 隆子 (札幌市内自主避難者コミュニティ「桜会」代表)「札幌避難者の現状」; 西山 祐子 (一般社団法人「みんなの手」代表理事)「京都広域避難者の三年半を振り返って」
- 12 月 14 日 三谷 恵子 (東京大)「『賢者アキルの物語』のスラヴ語圏テキストの比較研究:スラヴ文献言語学の再構築をめざして」; 中村 靖 (横浜国立大)「市場経済移行諸国の生産性成長パターンの比較研究」; 日臺 健雄 (埼玉学園大)「『計画経済に埋め込まれた市場』としてのコルホーズ市場に関する研究」(共同研究報告会)
- 12 月 16 日 林 幸秀 (独立行政法人科学技術振興機構研究開発戦略センター)、津田 憂子 (同)「ロシアの科学技術情勢」(北ユーラシア研究会、SRC セミナー)
- 12 月 17 日 岩本 和久 (稚内北星学園大)「1960 年代人の作家とスポーツ映画」(客員研究員セミナー)

- 12月18日 中野幸男（東京大）「インターネットと反体制：LiveJournal のナターリヤ・ゴルバネフスカヤ」（ユーラシア表象研究会）
- 12月19日 第11回スラブ・ユーラシア研究センター公開講演会 野町素己（センター）「言語・民族・宗教：ゴラ人の文化とアイデンティティを巡る諸問題」
- 1月11日 地域コンソーシアム（JCAS）2014年度次世代ワークショップ「近現代モンゴルにおける人間＝環境関係の変容」 辛嶋博善（センター）「牧畜のインヴェンション？：モンゴル国北東部・ヘンティー県の事例から」；風戸真理（北星学園大短期大学部）「モンゴルの牧畜は生業的か：畜産物としての畜糞利用より」；尾崎孝宏（鹿児島大）「モンゴル国南東部国境地域における牧畜：スフバートル県の事例」；富田敬大（立命館大）「モンゴル国北部地域における集団化と土地利用：ボルガン県の事例をもとに」；中村知子（茨城キリスト教大）「社会主義時代における牧畜と草資源利用の一例：ゴビ地域を中心に」；中村篤志（山形大）「清代モンゴル遊牧社会と王公『支配』：所有、移動、調整をめぐる」；浅野真希（筑波大）「モンゴル遊牧社会を支えてきた草原土壌と水文環境：モンゴル国北東部ヘルレン川流域の事例」
- 1月22日 Zaynabidin Abdirashidov（ウズベキスタン国立大／センター）「トルコにおけるフィラト：『イスラームを通しての自由』の最初の試み」（特別講義）

歴史の遺産とウクライナ内戦の勃発

イリーナ・パプコフ（ジョージタウン大学／センター 2014年度特任准教授）

最近内戦が起こるたびに、手を揉み絞り眉間にしわを寄せ、どこにその原因があったのかをCNNの視聴者に説明する評論家が姿を現す。ウクライナもその例に漏れない。この衝突の当初から専門家は、数世紀にわたる歴史を共有し、相互の婚姻も著しい程度に進んでいた人々の内側でなぜ突如として暴力が炸裂したのかの理由をめぐる様々な議論を提示してきた。

二つの競合する説明が公共圏を席卷している。一つはロシアの国家が統制するメディア、もう一つはアメリカとヨーロッパの怒れる「リベラルなメディア」から発信される。西側で人口に膾炙した語り口はほとんど自明なものだ。プーチンは邪悪な独裁者であり、ウクライナが民主的な西側の国家の一員として正当な場所を占めることを妨げようとしている。ドンバスでの住民の衝突はすべてプーチンの仕業である。これに対抗すべくロシアのメディアから流れる口調もまた同様に現実離れしたものだ。いわく、この戦争の責任は、これまでもずっとロシアを破滅させようとしてきた邪悪な西側にあり、いま西側は伝統的なロシアの勢力圏からウクライナを奪取することでこの自身の目的を追求しているのだ、と。

大学や研究所で静かに旧ソ連体制の研究に勤しんでいる学者や専門家は、経済上の利害関係の絡みも加味しつつ、言語的・民族的なアイデンティティの問題に焦点を合わせ、もっと



著者

ニュアンスに富む議論を組み立てている。内戦の理由に関する既存の社会科学の理論を一瞥しても、これらの研究者が「邪悪なプーチン」と同様に「邪悪な西側」のどちらか一方に肩入れする単純化した説明を拒否しているという意味で正しいということがわかる。というのも、内戦の原因は悪質な外部の大国による働きかけよりもずっと国内的な事情と関わっているからだ。

様々な内戦にありうる国内要因としてこんにちの研究は、経済的要因（このモデルでは「欲望」と呼ばれる）が枢要と論じる世界銀行の Paul Collier とその同僚を支持する方向に傾いている。ウクライナの場合にも経済的要因、とりわけ地元の様々なオリガルヒ（ロシア新興財閥）の利害が働いているという考えには基本的にうなずけるものの、これもまた単純にすぎる。いまドンバスで起こっている悲劇を包括的に分析するには、歴史の遺産がどのように紛争当事者の心理を形作っているのか、そしてどのようにそれが敵対する相手の見方を理解したり、持続的で平和的な解決を達成したりするのを妨げる目隠しとして作用しているのかを考察することが不可欠である。

「ロシア人とウクライナ人は歴史を共有している」というのは、よく知られた常套句だ。しかし、その歴史の解釈のされ方にはロシアだけでなくウクライナの様々な地方によって大きな開きがある。こんにちの内戦に最も妥当する形でいえば、この解釈の違いはとりわけ第二次世界大戦の経験に関わっている。

ロシアで支配的な語り口は実に明快だ。第二次世界大戦は「大祖国戦争」であり、英雄叙事詩のようなドイツのファシズムに対する戦いにソ連邦のすべての諸民族を団結させた。この勝利はとても偉大なもので、スターリンによる自身の市民に対する極悪非道な扱いさえ無罪放免にしてしまうほどである。この図式に当てはまらない歴史上の事実、例えばソヴィエト市民がドイツ人と協力したり、悪質な場合ドイツ側に立って戦ったりしたことなどは、そうした市民がそもそも反逆的な性向を持っていたことに言及したり、ウクライナやベラルーシに至っては、現地にファシストを支持する運動が存在したことによって説明される。一般論として、5月9日の伝統的な戦勝記念の祝祭がロシアで催される際には、利敵協力の事実は全く言及されない。

ウクライナではこれまでも状況はもっと複雑だった。その東部と南部の多くの部分ではロシア流の語り口が優勢だ。これらの地域に住むウクライナ人—自己認識として民族的ロシア人であれ、いわゆる「ロシア語系ウクライナ人」であれ、民族的ウクライナ人であれ—にしてみれば、第二次大戦の記憶は彼ら、彼らの父親そして祖父が英雄的にファシストのドイツを下した衝突にほかならない。しかしウクライナ西部では、第二次大戦はかなり違う形で記憶されており、ウクライナ人がウクライナ民族主義者組織（OUN）の指導でナチスとスターリン両方に対して民族独立のために結集して闘った時代とされている。第二次大戦は赤軍が民族解放の希求を最終的に打ち砕いた悲劇の時代であり、民族の解放は50年後のソ連解体とともにようやく達成されたと解釈されているのだ。他方、ウクライナ東部と南部の語りでは、OUNとその指導者ステパン・バンデラは紛うことないドイツ型ファシズムの信奉者として描かれており、民族解放の立役者とは受け入れられていない。

これらの対立する歴史解釈が現在進行中のウクライナ危機で果たしている役割は明らかだ。独立後最初の数年でウクライナの指導部は自分たちが民族や言語ばかりか、著しく異なる過去の捉え方によって分断されている国家を治めていることを理解したので、ひとつの国民的な物語を国全体に積極的に押し付けるようなことはしなかった。オレンジ革命の結果としてユシチェンコが大統領に選ばれたことは重大な変化をもたらした。彼はウクライナ西部の第二次大戦の見方にかかなりあからさまに肩入れし始めたからだ。東部と南部にとって、これは

ナチス・ドイツのシンパに政府のお墨付きを与え、ファシズムのないヨーロッパのために戦った家族の犠牲を否定することを意味した。それから十年後の2014年、ヤヌコヴィチ政権打倒に参画した人々の中にOUNをこれ見よがしに礼賛する者が現れると、東部と南部のウクライナ市民の重要な部分は、マイダン後の政府が西部ウクライナの物語を自分たちに押し付けてくるだろうと確信する十分な根拠を得ることになった。その論理的な帰結は、ウクライナのファシズムとヒトラーの勝利を墓場からわざわざ持ち出してくるように映ったのだ。

このように、比較的近い時代の歴史は相互に排他的な見方が網の目を成しており、これを解きほぐすのは非常に困難だ。しかし、どのような国民の一体性の感覚（幸福な将来のための必要条件である）を持ち合わせてあれ、ウクライナがこんにちの住民間の衝突から抜け出すためには、過去が和解を促す形で取り扱われなければならない。前進するための一つのありうる方法は、二つの見方が歴史的には単純に不正確であるということを確認することである。

一方で、ロシアの現体制に望ましく、東部・南部ウクライナで広く受け入れられている「団結」の物語は、歴史学の丁寧な検証には耐えられない。ソヴィエト市民のドイツとの協力は蔓延し根深いもので、ドイツ軍に仕えてソ連邦に対して戦った兵士の実に約20%がソ連出身者だったほどだ。いくつかの既存の研究では、この利敵協力の現象がソ連邦の周縁の少数民族（バルト諸民族、ウクライナ人、グルジア人など）による反ソ叛乱として片づけられているが、最近の研究では、民族的なロシア人住民でさえその重要な部分がスターリン体制から自分たちを解放してくれる勢力としてドイツ人を見て、そのような見立てで行動したと決定的に論証している。

他方で、OUNが非ファシズムの愛国的組織であり、ドイツとソ連両方に対する英雄的な戦闘でウクライナ人を導いたといった見方も、深刻な欠陥を抱えている。確かに1943年以降、OUNの武装派はドイツ人と戦闘した。しかし同時に、OUNの指導部がナチスのイデオロギーに著しく感化され、バンデラとその仲間たちが当初、独立ウクライナがヒトラーの「新ヨーロッパ」の一角を成すことを目論んでいたことも歴史上の明確な証拠が示している。この新たに解放されたウクライナには、ウクライナ人以外の誰にも居場所はなく、それはそこに住むポーランド人、ユダヤ人、ロシア人の根絶、最低でも追放を意味していたのである。ところがドイツ人自身がウクライナの独立を望まず、1941年にバンデラを逮捕すると、OUNはドイツと同盟する希望を思い直し、ドイツと上記の衝突に至った。しかしこれは、OUNのイデオロギーの中核がファシズムにとどまり、その軍事活動が現地の少数派だけでなく、OUNの独立ウクライナ像に同意しないウクライナ人にも向けられた戦争犯罪を内包していたという不都合な現実を消し去ることはない。

このもつれた歴史を相互に認め合うこと—現在進行中の紛争の両側から歴史家を交えた真実究明委員会を設けて、紛争後も啓発活動を継続することも第一歩だろう—が、ウクライナの国民的な和解を確かなものにするために進むべき長い道となるだろう。

(英語から長縄宣博訳)

2015年1月11日のパリ精神



「憎悪に抗する連帯を始めよう」の横断幕を持って
行進する市民

日11日のパリでは朝から、誰でも共和国広場に駆けつけられるよう全メトロが無料で開放された。大統領府に続々と世界各国首脳が到着する。筆者もそこからメトロで共和国広場に行こうと試みたが、すでにプラットホームは市民で溢れかえり、到着する車両は扉さえ閉まらないすし詰め状態だ。多くの市民と同じくメトロ乗車をあきらめて、筆者も徒歩で共和国広場に向かった。「我われは憎悪に抗する連帯を始めよう」と、連帯を示すプラカード、一輪のバラ、三色旗などを掲げ、乳母車を押す若い夫婦、子供の手を引く親、若者から高齢者に至るまでの一般市民が、参加することで自らの意思表示とするマニフェスタシオン行進に参集した。この流れに混じりながら、パリが目撃した幾多の歴史的マニフェスタシオンに、自分も参加しているという思いが筆者の胸にこみ上げた。

午後3時から英仏独はじめ各国首脳を先頭に共和国広場から行進が始まったが、共和国広場に通じる放射線状のバリの道がすべて大群衆で埋めつくされ、筆者も途半ばで身動きもできぬ状態のまま数時間を過ごすはめになった。最終的に120万ないし160万人が共和国広場に参集し、フランス全土では400万人がこの日の行進に参加したといわれ、各国でも連帯市民運動が展開した。

現在のパリはあらゆる人種が生活する街である。このテロ事件がイスラム系住民に及ぼす影響がむろん懸念される。開かれた国境の再検討、防衛の強化、あるいは欧米民主主義理念

家田 修（センター）

新年早々、フランスのテロ事件は世界を震撼させた。1月7日に出版社とユダヤ人商業施設を襲ったテロで17名が犠牲となり、イスラム過激派「アラビア半島のアルカーイダ」が犯行声明を出した。

欧州に出張中だった筆者はロンドンで第一報を受け、10日に仕事の最終目的地パリに入った。投宿したホテルはたまたま「共和国広場」近くだが、同広場では11日に追悼と反テロリズムへの国際的な連帯集会が行われた。前日10日にフランス全土で70万人の市民が集会を催し、国際連帯集会当



アラビア語、ロシア語など多言語で
「私はシャルリ」を表現



17名の犠牲者への献灯供養



多国籍の行進参加者

の一体感が表明され、これらはいずれどのような結果を生じてゆくのか、注意深く見守るべき動きが胎動し始めた。しかし「1・11パリの精神」とは、異なる宗教、民族、習慣を排撃するのではなく、「自由なきフランスはフランスにあらず」と掲げる高次元の普遍的理念によって、我彼の区別を超えて反テロリズムの意志を示すことにある。フランスの精神的伝統が生き続けているのをここに見る。また民衆が自ら意思を表明し参加する、フランス革命以来の

精神は、今も世界を動かす。



イスラム圏であるトルコの旗も参加

の連鎖を否定し、イスラム世界とも連帯する反テロリズムを標榜する。イスラエル首相とパレスチナ議長の双方が1・11に招かれ、参加した意義は大きい。「1・11パリ精神」を世界がどう継承し、発展させるかが問題であろう。教育とは知性のみならず良識の育成である。日

ひるがえって日本はどうだろうか。若い世代は自分が世界を創り、動かすのだという、自負と責任を実感しているだろうか。筆者の欧州出張では最初の訪問地ベルリンで、日本通のドイツ原子力倫理委員会委員M・シュラーズ女史と語り合った。女史は、日本とドイツは格差、高齢化、多民族化という共通の問題に直面しているが、日本社会はピラミッド型構造が強固で、学生が受け身のまま組織に取り込まれてしまいがちだが、ドイツでは連邦制のおかげで地域の自主性が健在であり、何より、学生が社会問題を自由闊達に議論しているところに未来を感じるのだと指摘した。

14年前のニューヨーク9・11同時多発テロは、アメリカ主導による報復、憎悪の連鎖、宗教的な不寛容、そして対テロ戦争によるおびただしい犠牲者を生み出した。しかし「1・11パリ精神」とは暴力



日本からの連帯の表明と献花

本の若者よ、世界と共に活動し、世界中のヒューマニズムと連帯して、憎悪の連鎖を断ち切ろう。我彼を超えて協働する新しい知性創造が日本の教育であるはずだ。事実として日本は、武力によらず世界平和に70年あまり貢献し続けている。共和国広場に捧げられた各国語のメッセージに日本語が見つからず、ささやかな花束と一緒に日本語による連帯を、筆者は捧げずにはいられなかった。

学 界 短 信

◆ 学会カレンダー ◆

- 2015年4月8-11日 Association for Borderlands Studies (ABS) の第57回年次大会 於ポートランド市
4月23-25日 ASN (民族研究協会) 第20回年次世界大会 於コロンビア大学
<http://nationalities.org>
6月27-28日 日本比較政治学会 2015年度研究大会 於上智大学 <http://www.jacpnet.org>
7月30-31日 スラブ・ユーラシア研究センター夏期国際シンポジウム
8月3-8日 ICCEES 第9回大会 於幕張 <http://www.l.u-tokyo.ac.jp/makuhari2015/>
10月30日 -11月1日 日本国際政治学会 2015年度研究大会 於仙台国際センター
http://jair.or.jp/index_j.html
10月31日 内陸アジア史学会 2015年度大会 於京都外国語大学
<http://nairikuajia.sakura.ne.jp/SIAS/>
11月19-22日 ASEEEES (スラブ東欧ユーラシア学会) 第47回年次大会 於フィラデルフィア市
<http://www.aseees.org>
11月28日 ロシア・東欧学会 2015年度研究大会 於上智大学 <http://www.gakkai.ac/roto/>

センターのホームページ(裏表紙参照)にはこの他にも多くの海外情報が掲載されています。[大須賀]

編集室だより

◆ Eurasia Border Review 5(2) の刊行 ◆

英字誌 *Eurasia Border Review* Vol.5, No.2 が2014年秋に発行されました。ホームページからダウンロードして読むことができます。[岩下]

<Articles>

Paradiplomacy as a Sustainable Development Strategy: The Case of Russia's Arctic Subnational Actors *by* Alexander Sergunin and Pertti Joenniemi

Tourism across the EU-Russian Border: Official Strategies vs Unofficial Tactics by *Serghei Golunov*
The Long Shadow of Borders: The Cases of Kashubian and Silesian in Poland by *Tomasz Kamusella and Motoki Nomachi*

<Research Note>

Locating Borders in an Age of Global Flows: Is Border Thinking/Instance Everywhere? by *Krishnendra Meena*

<Discussions>

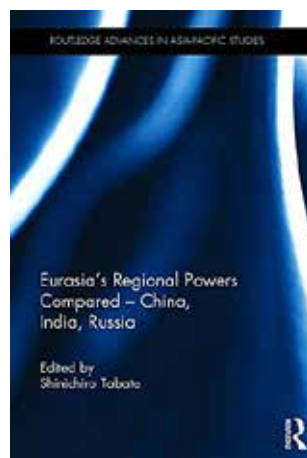
The Struggle for Arctic Regional Order: Developments and Prospects of Arctic Politics by *Fujio Ohnishi*
Discourses on Neoliberalism in Japan by *Tsutomu Hashimoto*

<Book Review>

Vera Tolz, *Russia's Own Orient: The Politics of Identity and Oriental Studies in the Late Imperial and Early Soviet Periods*, Oxford University Press: Oxford and New York: 2011, 224 p. by *Denis V. Volkov*

◆ *Eurasia's Regional Powers Compared* の刊行 ◆

新学術領域研究「ユーラシア地域大国の比較研究」の成果が、Shinichiro Tabata, ed., *Eurasia's Regional Powers Compared: China, India, Russia*, Abingdon, Oxfordshire, UK: Routledge, 243p, 2015として刊行されました。上記新学術研究の選りすぐりの成果を収めたもので、6つの計画研究の研究代表者・分担者を中心に、総勢17人（上垣彰、丸川知雄、金野雄五、田畑伸一郎、大串敦、安達祐子、田原史起、唐亮、中居良文、伊藤融、池田嘉郎、秋葉淳、小松久恵、越野剛、高橋沙奈美、前島訓子、小林宏至）の方に参加していただきました。同書は、上記新学術領域研究の学際性を反映して、経済発展、政治体制と外交、歴史、文化と社会の4部から成り、計13の章から構成されています。新学術領域研究の成果は、日本語では6巻本（うち4巻が既刊）としてミネルヴァ書房から刊行されていますが、英語のものとしては、同書が中心となると位置付けております。[田畑]



会議 (2014年11-12月)

◆ センター共同利用・共同研究拠点運営委員会 ◆

2014年度第2回 12月14日（日）

議題

1. スラブ・ユーラシア研究センター共同研究員の選考について
2. 共同利用・共同研究公募について
3. その他

◆ センター共同利用・共同研究拠点課題等審査委員会 ◆

2014年度第1回 12月14日（日）

議題

1. 共同利用・共同研究公募課題の審査について

◆ センター協議員会 ◆

2014 年度第 2 回 11 月 18 日（火）

- 議題
1. 2015 年度特任教員（外国人招へい教員）候補者の選考について
 2. 大学間交流協定について
 3. その他

2014 年度第 3 回 12 月 22 日（月）

- 議題
1. スラブ・ユーラシア研究センター長の辞任について
 2. スラブ・ユーラシア研究センター長候補者の選考について
 3. 大学間交流協定について
 4. その他

[事務係]

みせらねあ

◆ 高橋美野梨氏が第 1 回日本島嶼学会研究奨励賞を受賞 ◆

日本学術振興会特別研究員で本センター所属の高橋美野梨氏が、第 1 回日本島嶼学会研究奨励賞を受賞しました。授賞理由は、氏の研究テーマであるデンマーク領グリーンランドにおける自治論において、「対外的自治」と「対内的自治」の観点から、権限として獲得した自治の性質を明らかにした点にあります。氏の以上の業績を称えて、2014 年 9 月 5 日の五島大会での授賞式において、日本島嶼学会長嶋会長より賞状と副賞が授与されました（日本島嶼学会 HP より抜粋）。[森下]

◆ 本田晃子氏が第 36 回サントリー学芸賞を受賞 ◆

センターの共同研究員本田晃子氏が、第 36 回サントリー学芸賞を受賞しました！ 受賞部門は思想・歴史部門です。

サントリー学芸賞は学術界の芥川賞とも呼ばれる荣誉ある賞で、1979 年の創設以来、将来を嘱望される若手研究者の多くが受賞してきたことで有名です。今回の受賞対象は『天体建築論：レオニドフとソ連邦の紙上建築時代』（東京大学出版会）です。この単著は本田さんが 2011 年に東京大学大学院総合文化研究科に提出した博士論文をもとにしたものであり、博士論文自体も第三回東京大学南原繁記念出版賞（2013 年度）を受賞しています（センターニュース 133 号に紹介があります <http://src-h.slav.hokudai.ac.jp/jp/news/133/images/CNews133.pdf>）。

今回の受賞によって、本田さんの研究は再度、さらに高く評価されることになりました。選評並びに本田さんの受賞の言葉など、受賞の詳細については、サントリー文化財団のウェブページをご覧ください。

<http://www.suntory.co.jp/news/2014/12215.html> [高橋沙奈美]

◆ 人物往来 ◆

ニュース 139 号以降のセンター訪問者（客員、道央圏を除く）は以下の通りです（敬称略）。
[田畑／大須賀]

- 11月15-16日 井上貴子（大東文化大）、松川恭子（甲南大）、村上志保（立命館大）
 11月26日 Pavel Minakir（ロシア科学アカデミー極東支部経済研究所）
 12月4-6日 Mikhail Alexeev（サンディエゴ大、米国）、Dávid Karácsonyi（ハンガリー科学アカデミー地理学研究所）、Alexandr Livshin（モスクワ国立大、ロシア）、Krishnendra Meena（ジャワハルラー・ネルー大、インド）、Marek Menkiszak（東方研究所、ポーランド）、Rune Rafaelsen（ノルウェーパレンツ事務局）、Andrea Schmidt（ペーチ大、ハンガリー）、Vladimir Semenov（中央海洋船舶設計研究所、ロシア）、Shim Sang Jin（京畿大学校、韓国）、Yaroslav Shulatov（広島市立大）、Yang Cheng（華東師範大学、中国）、Zhao Huasheng（復旦大学、中国）、Hahn Jeong-Sook（ソウル大学、韓国）、Leem Kyung Hoon（同）、Lee Kwong Wan（同）、Min Byung-Chun（同）、Park Won-Ho（同）、Shin Beom-Shik（同）、Yi Ok-Yeon（同）、浅野豊美（中京大）、浅野夏子、池田嘉郎（東京大）、伊集院敦（日本経済研究センター）、出水薫（九州大）、大西広之（法務省）、大西富士夫（日本大）、大野正美（朝日新聞）、川久保文紀（中央学院大）、国末憲人（朝日新聞）、篠原琢（東京外国語大）、田村慶子（北九州市立大）、八谷まち子（九州大）、服部倫卓（ロシアNIS貿易会）、花松泰倫（九州大）、日笠里香（九州大）、船本早紀（九州大）、山崎孝史（大阪市立大）、山根聡（大阪大）
 12月7日 西山祐子（一般社団法人「みんなの手」代表理事）
 12月14日 窪田順平（総合地球環境学研究所）、志摩園子（昭和女子大）、高倉浩樹（東北大）、月村太郎（同志社大）、豊川浩一（明治大）、中村靖（横浜国立大）、服部文昭（京都大）、日臺健雄（埼玉学園大）、三谷恵子（東京大）
 12月16日 津田憂子（独立行政法人科学技術振興機構研究開発戦略センター）、林幸秀（同）
 12月18日 中野幸男（東京大）
 1月11日 浅野真希（筑波大）、尾崎孝宏（鹿児島大）、富田敬大（立命館大）、中村知子（茨城キリスト教大）、中村篤志（山形大）

◆ 研究員消息 ◆

田畑伸一郎研究員は2014年10月6～7日の間、聞き取り調査及び資料収集のため、ロシア（モスクワ）に出張。また続けて10月7～12日の間、シンポジウム参加のため、ロシア（アルハンゲリスク）に出張。また11月3～9日の間、打ち合わせ及びサステイナビリティ・ウィーク2014「フィンランド - 日本共同シンポジウム」参加のため、フィンランドに出張。また、11月19～25日の間、第46回スラブ東欧ユーラシア学会（ASEEES）出席のため、米国に出張。また11月29日～12月3日の間、北海道大学交流デー実施業務のため、ドイツに出張。

岩下明裕研究員は10月27～29日の間、科学研究費研究におけるシンポジウム出席のため、台湾に出張。また11月2～9日の間、科学研究費研究における研究打ち合わせ及び国際会議出席・発表のため、英国、フランスに出張。また11月21～22日の間、科学研究費研究における学術会議出席のため、韓国に出張。また12月8～11日の間、科学研究費研究におけるコンファレンス出席・発表のため、香港に出張。

Wolff David 研究員は11月19日～12月1日の間、第46回スラブ東欧ユーラシア学会（ASEEES）出席及び資料収集のため、米国に出張。

長縄宣博研究員は11月19～25日の間、科学研究費研究における第46回スラブ東欧ユーラシア学会（ASEEES）出席・発表のため、米国に出張。

野町素己研究員は11月19～26日の間、科学研究費研究における第46回スラブ東欧ユーラシア学会（ASEEES）出席・発表及び研究打ち合わせのため、米国に出張。また11月29日～12月5日の間、科学研究費研究における資料収集のため、イスラエルに出張。

望月哲男研究員は11月27日～12月4日の間、博士論文公開審査出席及び講演及び討論会出席のため、スウェーデンに出張。

鬼内勇津流研究員は11月28日～12月6日の間、科学研究費研究における資料収集のため、ロシアに出張。

宇山智彦研究員は北海道大学交流デー研究交流セミナー開催及び科学研究費研究における研究会報告のため、ドイツに出張。

[事務係]

目 次

新センター長から.....	1
研究の最前線.....	2
2014年度冬期国際シンポジウム「境界：ユーラシアで交差する動力」開催される／ブレイメン大学東欧研究センターで合同ワークショップを開催／ソウル大とのジョイント・シンポ分科会「ウクライナはどこへ」開かれる／アムール・オホーツクコンソーシアムの国際ワークショップ開催される／特別シンポジウム「社会主義・ポスト社会主義と戦後日本社会：佐藤経明先生の遺産」開催される／JIBSN：竹富セミナー盛況のうちに終了／2015年度「スラブ・ユーラシア地域（旧ソ連・東欧）を中心とした総合的研究」に関する公募結果／2015年度鈴川・中村基金奨励研究員募集中／研究会活動	
歴史の遺産とウクライナ内戦の勃発 by イリーナ・パプコフ.....	9
2015年1月11日のパリ精神 by 家田修.....	12
学界短信.....	14
学会カレンダー	
編集室だより.....	14
<i>Eurasia Border Review</i> 5(2)の刊行／ <i>Eurasia's Regional Powers Compared</i> の刊行	
会議.....	15
センター共同利用・共同研究拠点運営委員会／センター共同利用・共同研究拠点課題等審査委員会／センター協議員会	
みせらねあ.....	16
高橋美野梨氏が第1回日本島嶼学会研究奨励賞を受賞／本田晃子氏が第36回サントリー学芸賞を受賞／人物往来／研究員消息	

2015年2月6日発行

編集責任	大須賀みか
編集協力	宇山智彦
発行者	田畑伸一郎
発行所	北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター 060-0809 札幌市北区北9条西7丁目 Tel.011-706-3156、706-2388 Fax.011-706-4952 インターネットホームページ： http://src-h.slav.hokudai.ac.jp/
